

## 聖金曜日

今日はイエス様が亡くなられた聖金曜日です。イエス様は聖木曜日の夜、最後の晩餐を行ってから、弟子たちと一緒にキドロン谷にある園に行かれました。その園は弟子の一人であったイスカリオテのユダも知っているところで、ユダはすでにイエス様をユダヤ人の指導者たちに渡そうとしていました。ユダヤ人たちの指導者たちは一隊の兵士たちをユダと一緒に送り、その園でイエス様を捕らえさせたのです。それからイエス様は大祭司たちの尋問をお受けになり、金曜日の朝、ピラトのもとまで引き引っ張られたのです。ピラトはイエス様を釈放しようとしたのですが、ユダヤ人たちの反発に負けられてイエス様を十字架に付けることになってしまいました。時間的なことを考えてみたら、イエス様は12時頃に十字架に付けられ、午後3時ごろに息を引き取られたと言われます。それで、伝統的に全世界の教会は今日の午後3時に「十字架の道行き」を捧げます。それはイエス様が亡くなられた時間で、私達は十字架の道を歩みながら、イエス様の苦しみに与るのです。

それから適当な時間をおいて聖金曜日の祭儀を行います。厳密な意味でその儀式はミサではありません。まず、司祭は沈黙の中で入堂して、祭壇の前でひれ伏して、或は、跪いて祈ります。そして、祭壇に上って集会の祈りを捧げます。それから、第一、第二朗読の後、福音を読みますが、その福音は「ヨハネによる受難記」とも言われます。司祭はそれを枝の主日のように何人かの信者さんたちとともに読みます。そして、簡単な説教の後、全世界の教会や教皇、教役者と信者の皆さん、洗礼志願者、キリスト者の一致、ユダヤ教の人々、キリストを信じない人々、神様を信じない人々、政治に携わっている人々、また、苦しんでいる人々の為の祈りを捧げます。まさに、それは全世界と全人類の為の祈りなのです。その祈りの後、司祭は紫の布で覆われた十字架を手にもって、聖堂の後ろから入堂し、決められた場所に来ると「十字架の賛歌」を二度歌います。その時、司祭は少しずつ紫の布を外して、十字架に釘付けられたイエス様の姿を信者の皆さんに見せます。そして祭壇に到着すると、三度目の賛歌を歌って、紫の布を完全に外し、その十字架を祭壇の前に置いておいて礼拝します。併せて、信者さん達も行列して祭壇の前まで進み出て、イエス様の十字架に向かって礼拝します。その礼拝が終わると、司祭は仮祭壇からご聖体を運んで来て、信者の皆さんにご聖体を授けます。その後、司祭は普段のミサの祝福ではなく、「民の為の祈り」を捧げます。それはイエス様が亡くなられたことにより、イエス様が制定されたミサではないので、ただ、神様からの祝福を願う為に祈るということです。こうして、教会はミサではない聖金曜日の祭儀を行います。その祭儀はイエス様の受難と死に集中されています。そして、それに参加する信者の皆さんは、イエス様がなぜ十字架の死を味わわねばならなかったのかを黙想しつつ、自分達がどれほど弱い人間なのか、また、どれほど罪に傾きやすい者なのかを顧みるようになります。併せて、イエス様の愛にもっと深く一致して生きること、復活と永遠の命に向かう希望、または、愛の生活の大事さを悟るように招かれるのです。

さて、皆さんもご存知だと思いますが、ピラトの裁判で、イエス様の代わりに釈放された人がいました。彼

## 聖金曜日

はバラバと言われた人です。今日の受難の福音はヨハネによる福音で、そこにはバラバについて、ただの強盗であったと書かれています。マタイによる福音には次のように、もっと詳しいことが書かれています。「ところで、祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することになっていた。そのころ、バラバ・イエスという評判の囚人がいた。ピラトは人々が集まってきたとき言った。『どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか。』」と。つまり、バラバもイエス様も、元々は同じ「イエス」という名前を持っていたということです。解釈によってちょっと違う意見がありますが、「バラバ」とはその人のニックネームで、意味は「神様の子」と言われます。言い換えれば、ピラトは「神様の子といわれるイエスか。メシアといわれるイエスか。」と群衆に問いかけますが、群衆は「バラバを。」と答え、更に、イエス様については「十字架に付けろ。」と強く要求したのです。それは祭司長たちの説得による答えでしたが、群衆は彼らの説得に耳を傾けてしまったのでしょう。

イエス様は神様の真の子であり、真のメシアでしたが、人間の罪を取り除くための神様の小羊として十字架に付けられました。人間としてのイエス様の人生は、いつも、神様に従うことだけでした。イエス様は常に神様に耳を傾け、また、神様の意向に沿って生活されたのです。愚かな群衆も、彼らの指導者たちも、イエス様のその様子をよく知っていたでしょう。しかし、神様に従うのは律法を文字のままに守ることで十分だと思い、それより最も大事な「真の信仰と隣人愛」は軽く扱っていたのです。真心をもって神様に従うこと、隣人を自分のように愛することが彼らにとっては、十字架より重いものだったかもしれません。むしろ、彼らにとってもっと重要なことは、自分たちの欲心をかなえること、自分たちの立場や意見、やり方などを失わないことだったのではないかと思います。そうしたら、神様ではなく世のささやきに耳を傾けるようになることは当然なことでしょう。でも、それはただ、2千年前のユダヤ人たちのことだけではありません。今の時代の私たちも、いつでも、色々なニックネームの救い主に従い、それを守ろうとする誘惑に陥る可能性を持っています。

最後のことですが、主の受難に関する叙唱(感謝の賛歌の前、司祭が唱える賛歌)の中で、次のような部分があります。「あなたは人類を十字架の木によってお救いになり、木から死が始まったように、木から生命を復活させ、木によって勝ち誇った悪霊を、木によって打ち滅ぼしてくださいました。」という部分です。罪と死はいつも人のそばにあって、人が自分を神様より高めようとするように誘い、その結果、神様に背いて、手を伸ばしてはならない世の様々な木に向かって、手を伸ばすようにします。しかし、イエス様は、ただ、神様が与えてくださった十字架の木に向かって、ご自身の手を伸ばし、それを抱いてくださいました。私たちの手はどんな木に向かって伸ばされているのか、静かに顧みたいと思います。今日、イエス様の受難の祭儀を行いながら、信者の皆さんがイエス様の愛をもっと豊かに頂くことができるよう、お祈りいたします。